

# 日本行動分析学会ニュースレター

J-ABAニュース  
1998年 秋号 No. 13

## 日本心理学会シンポジウム報告： 教育実践研究への認知的アプローチと行動的アプローチ

山本淳一(明星大学)  
日本行動分析学会研究委員会

本年の日本心理学会(東京学芸大学)で、日本教育心理学会と日本行動分析学会の 共催シンポジウムが開かれました(1998年10月10日)。これは、日本心理学会から、年次大会の全体テーマを「リエゾン」としたので学会間での共催シンポジウムを企画してくれないかとの提案があり、日本教育心理学会にその旨を打診し、両学会の研究 委員会の共催ということで実施されました。立ち上げの際には、小野浩一理事長みず からも、先方へのコンタクトや依頼など行って下さいました。話題提供、指定討論いただいた先生方、どうもありがとうございました。

本稿はこのシンポジウムの報告です。当日は、裏ではデヴィット・ブレマックのシンポジウムが行われていたにもかかわらず、大変多くの参加者がありました。私は当日は司会者であったので、自分の意見をできるだけ言わないようにし、論点の絞り込みのみに徹しました。ただ、その時も言いたいことが山ほどあったので、以下は、行動分析学の観点から私の意見や感想を入れて書いていきます。文中の( )内の氏名は、意見を述べられた先生のお名前です。

テーマは「教育実践研究のアプローチを探る」。話題提供者は、教育心理学会から市川伸一先生(東京大学)、鹿毛雅治先生(慶應義塾大学)、行動分析学会からは中野良顯先生(上智大学)、島宗理先生(鳴門教育大学)、指定討論者は、三宮真智子先生(鳴門教育大学)でした。大きな趣旨としては、教育現場で起きている様々な問題を解決するために、心理学(者)が、明確な方法論を基礎にして、どのような貢献ができるのか、意義のある研究ができるのかを討議するために企画されました。

行動分析学には以下のような概念的、方法論的特徴があり、それらの問題について教育心理学の実践研究者の方たちと考えたいと思いました。◆相関分析ではなく因果分析を行っていること。◆個別ケースを徹底的に分析すること。◆テクノロジーとしての体系的な方法論をもっていること。◆理論優先型ではなく問題解決型の思考を行うこと。◆子どもとそれを取りまく環境との相互作用について「システム論」的な見方をとること。◆応用的な観点からは、プロセスというよりプロダクトを重要視すること。◆得られた結果をフェアにデータとして示していくこと(accountability)。

心理学の分野では、そのパラダイムを異にする学派どうしは、お互いの枠組みや方法論の検討に終始することが多く、お互いのパラダイムの差異のみが強調される傾向が見られます。それが、きちんとした科学方法論や論理学の基礎の上ののったものであれば、理論上の相互批判は意味があるのですが、そうではなく単なる印象(感想)のみが語られることも見受けられます。しかも、お互いの研究の方法論やそれが発見してきた「事実(fact)」に言及することなく批判しあっているのでは意味がありません。その点から、今回は共通の問題設定として、「実践上」の問題に絞って議論したいと考えました。教育現場で現在起こっている問題のいくつかに焦点をあて、それを解決していくための教育実践上の具体的な手段や研究方法を、異なったパラダイムにたつ研究者が討議することを目的としました。

まず、教育心理学の最近の動向から。テーマとしては、たとえば、「学習の動機づけ、学習方略、問題解決のヒューリスティックス、素朴概念やメンタルモデル、など、学習者の内的過程に焦点を当てた研究が多い(市川)」ということです。これらは、情報処理パラダイムを中心にしたテーマです。行動分析の側にも問題解決のストラテジーなどを言語行動連鎖として分析する基礎研究があれば面白いと思います。また、その言語行動が自動化していく様子は、ヴィゴツキーが、外言が内言化していく過程としてとらえたもので、行動分析学からは行動が流暢に(fluent)になっていくことに他なりません。また、subtle eventとして分析することも可能だと思えます(Hayes,1994)。

一方、情報処理パラダイムのアンチテーゼとして、近年の認知研究では「状況論的アプローチ」が生まれています。この立場では、「共同体の中で他者や道具と関わりながらアイデンティティを形成していく過程としてとらえようとする。方法としては文化人類学等のエスノグラフィを採用し、学校での学習場面を社会における学習と対比しながら、その特徴を明らかにしようとしている(市川)。」これは広い意味でのエコロジカル・アプローチであり、その意味で「モジュールとしての認知」から

全く離れているので、何故「認知」という用語にこだわるのかわかりません。例えば、知覚についてのエコロジカル・アプローチの創設者であるJ.J.ギブソンの知覚論は、行動分析学の知覚論といってもいいくらいのもので、Journal of the Experimental Analysis of Behavior には、J.J.ギブソンについての理論論文(Costall,1984)と実験論文(Turvey, Solomon, & Burton, 1989)が出ています。

他方では、「現場サイドからも研究者サイドからも、「実践的アプローチ」とでもいうべき研究が起こりつつある。これは、授業、個別学習指導、高等教育、社会教育などの教育実践に自ら関わってその改善を志向する中から問題を抽出し、理論的研究としても展開していこうというアプローチである(市川)。」こころへんは、行動分析学の得意な領域です。理論的、実験的、実践的研究が山ほどありますから。行動分析学には、教育の問題はひとつの研究領域というより、学問の構造そのものに内在しているテーマだと思えます。

このような教育心理学の現況にあって、市川先生からは、認知カウンセリングの話が話題提供されました。情報処理的人間観とカウンセリング・マインドをもって、子どもたちの学習を、個別指導を中心に進めていく方法と実践の紹介です。例えば、数学についてみると、方略そのものを学習していく過程と、基礎的な問題解決方略の形成、問題解決後の事後処理(どうしてできなかったのか、どうしてできたのかの自己フィードバック)などが、現在の教育課程には欠けていて、それを形成する必要があることが、認知カウンセリングの実践例を通して提案されました。

鹿毛先生からは、教育効果に関する基礎的な実験研究が話題提供をされました。基礎的なデータとして到達度評価が内発的動機づけを高めることや相対評価がそれを低めることなどの研究結果が示されました(方法の問い)。また、授業分析の方法として、実際の授業場面での教師と子どもとの相互作用を分析し、その個別的なデータから汲み上げて全体的な枠組みをつくる研究が述べられました(事実の問い)。教育実践研究は、個人間、個人間対話のための理論構築を目指していくものであることを強調されました(価値の問い)。

中野先生からは、行動分析学にもとづく緻密なカリキュラム構成と教示方法の体系である「直接教示法(direct instruction)」を、その歴史的・理論的背景とその実践を、重厚な資料をもとに紹介していただきました。実際の学校内で中野先生と現場の先生たちが授業研究を通じて協力して作り上げたカリキュラムとその評価システムとその効果を、実験計画にもとづいたデータというかたちで示していただきました。さらに、青少年の健全育成のための学校を中心とした行動論的な地域支援プログラムの内容と実践についてもお話しいただきました。行動コミュニティ心理学の提案です。

島宗先生は、行動分析学が教育問題の解決に貢献するためには、社会的、経済的に受け入れられるかたちで、要望(ニーズ)に応えられるようなプログラムをつくりあげること、その導入と運用をサポートすることなどを指摘されました。特に行動分析学会の実践家(教師、施設職員など)の割合が教育心理学会にくらべて大変多いことがデータとして示され、行動分析学の問題解決力へのニーズの高さが示されました。また、実践研究の例として、教員採用試験のための小論文作成について、セルフ・チェック行動の獲得とその効果のデータが示され、それにより、ターゲット行動の定義、変数の分析、手続きの導入、結果の評価と改善といった行動的介入の一連の流れが話題提供されました。

指定討論の三宮先生は、教育実践研究における、行動的アプローチと認知的アプローチの相互理解を行う必要性を強調されました。また、質問事項として、認知的アプローチではデータ収集の範囲をどう設定するか、行動的アプローチでは環境の範囲をどう設定かなどが出されました。

また、フロアからは、実践研究における教師指導のありかた、ターゲット行動の選択と指導による弊害、実践の場をどうやって広げていくのか等の質問や意見が出されました。以下、それぞれの先生の回答です。

確かに実践研究のデータは、オーソドックスな論文を書くときの数値化データにはなりにくい。プロトコル分析などが有効です(市川、鹿毛)。行動分析学からは、プロトコル分析の対象となる言語報告や問題解決中の言語反応などを、「行動とは別に存在する認知」の表現としてではなく、ひとつの行動として他の行動と同じ水準で理解しようとしています。プロトコル分析については、理論的研究(Hayes,1986)、や実験的な研究(Wulfert, et. al,1991; Fields, et.al,1997)も行われています。教育心理学会の機関誌である「教育心理学研究」でも、実践研究を推進されている先生たちの努力で、今後は実践研究論文を積極的に掲載していく方向が実現されるとのことです(市川、鹿毛、三宮)。そこで、研究データそのものの問題は議論されることになるのでしょうか。

行動分析で環境といったとき、より広い範囲を指します。環境の要因は、その時に存在する直接的な近因だけでなく、遠因(セッティング事象、動因操作、情動操作を含む確立操作)も含まれるのです(中野)。中野先生は、「きれる子どもたち」を理解するためには、現場の先生たちが、確立操作などの遠因を分析できる力をもつことが不可欠であることを事例をあげて強調されました。

自己修正型の科学が教育実践研究である。鹿毛先生は、研究で得られた結果を次の実践につなげていくフィードバック回路とすることが重要であることを強調されました。行動分析学の枠組みに対応させると以下ようになります。「ねらい(ねがい)」はターゲット行動の設定、「把握」はアセスメント、「活用」は介入、「判断」は結果(効果)を弁別刺激として次の介入を設定すること、またターゲット行動の社会的妥当性のこと。これは、まさにシステム論的な(島宗)行動分析学の考え方です。応用行動分析学は、教師と子どもとの関係へのコンサルテーションのツールとして有効なも

のでしょうし(中野)、インターネットでのコンサルテーションも展開していくことが可能だと思います(島宗)。

一方、このシンポジウムを通じて、認知的アプローチと行動的アプローチの違いも明確になってきました。まず、認知的アプローチでは、思考の方略や動機づけ機能などの媒介変数を重要視しているという点です。もしそれらに概念的妥当性があるとしたら、理論の中での体系性と予測可能性に寄与する場合であると思います。例えば、動機づけ、有能感などは、独立変数なのか、従属変数なのか？あるいは、それは行動とはレベルの異なった「心理的実体」なのか？そのことは、おそらく、その枠組みに直接従って教育実践を行った場合に、「予測と制御」が可能となるかどうかによってのみ実証されるものであると思います。理論研究、基礎研究、応用研究が乖離しているとしたら、その検討が最も重要であると思います。

認知的アプローチの特徴は、テーマの多様性にあるように感じました。新鮮なテーマを旬のうちにピックアップして、さっと概念化してまとめていく。それに対して、行動的アプローチは、枠組みの包括性、体系性が最も大切な部分であると思います。行動分析学も、これからは、どんどん新しいテーマに切り込んでいけたらと、私自身の仕事を含めて考えました。

教育実践研究もやはりデータで勝負していくべきだと思います。実験計画も、本格的な単一被験者実験計画法を用いない場合でも、Aデザイン(要するに実態調査か、センシティブな従属変数を探するための研究)、Bデザイン(いわゆる、臨床研究はこれが多いです)、ABデザイン(せめてここまではデータが欲しい)、のどれをやっているのかを明示する必要があると思います。このような、基準の中での実践研究であれば、認知的アプローチと行動的アプローチで得られた「事実」について、フェアで意味のある直接的な議論ができると考えています。

はじめにあげた7つのテーマ全てについて、詰めた議論を十分できたとはいえませんでした。教育実践研究の共通の方向性は確認できたと思います。シンポジウムは、今後の意味のある議論のための弁別刺激です。議論を継続し維持することこそが重要なのですが、シンポジウムが終わってしまうと、直接効果的随伴性、間接効果的随伴性からはなれてしまうので難しいかもしれません。これからは、論文によって、効果的随伴性をつくって議論を維持する必要があると思います。先にも述べましたように「教育心理学研究」は、毎号「実践研究」のコーナーを設けることになったそうです。行動分析学会員の方たちも、ぜひ投稿しましょう。今後の意味のある議論は、論文の査読プロセスとプロダクトとしての論文そのものの中で展開したいと思っています。

## 文 献

Costall, A. P. (1984). Are theories of perception necessary? A review of Gibson's *The Ecological Approach to Visual Perception*. *Journal of the Experimental Analysis of Behavior*, 41, 109-115.

Turvey, M. T., Solomon, H. Y., & Burton, G. (1989). An ecological analysis of knowing by wielding. *Journal of the Experimental Analysis of Behavior*, 52, 387-407.

Hayes, S. C. (1986). The case of the silent dog - verbal reports and the analysis of rules. A review of Ericsson and Simon's *Protocol Analysis: Verbal Reports as Data*. *Journal of the Experimental Analysis of Behavior*, 45, 351-363.

Hayes, L. J. (1994). Thinking In S.C. Hayes & L. J. Hayes, M. Sato, & K. Ono (Eds.) *Behavior Analysis of Language and Cognition*. Reno, NV. Context Press. Pp.149-164

Wulfert, E., Dougher, M. J., & Greenway, D. E. (1991). Protocol analysis of the correspondence of verbal behavior and equivalence class formation. *Journal of the Experimental Analysis of Behavior*, 56, 489-504.

Fields, L., Reeve, K. F., Rosen, D., Varelas, A., Adams, B. J., Belanich, J., & Hobbie, S. A. (1997). Using the simultaneous protocol to study equivalence class formation: The facilitating effects of nodal number and size of previously established equivalence classes. *Journal of the Experimental Analysis of Behavior*, 67, 367-389.

---

## 研究室紹介：三人寄れば文殊の知恵： 問題解決の科学をめざすコラボレーション

島宗 理(鳴門教育大学)

今年4月に開通した神戸と淡路島をむすぶ明石大橋を渡って淡路島を縦断し、渦潮の真上に架かる鳴門大橋を渡ると、そこは四国の玄関口、徳島県鳴門市。わかめとレンコンが名産の風光明媚なこの街に、鳴門教育大学が開学したのは今から15年のことです。上越教育大学、兵庫教育大学とともに『新構想大学院』と呼ばれ、現職教員の再教育を目的として設置されたのでした。現在、大学改革のまっただなかですが、日本の学校教育の質を向上するため、現職教員に研究の機会を保障するという基本的な考えには今も変わりはありません。

さて、学校教育研究センターには、教育工学分野、教育資料・交流分野、実地教育分野の3つの分野が設置され、それぞれ独自の業務が決められています。たとえば、我々、教育工学分野には「教授・学習メディアに関する基礎研究とその応用」とか「教師教育のための情報教育カリキュラム・教材の開発研究」といった業務があるわけです。こうした業務の定義に沿いながらも、具体的な教育研究活動は、スタッフの専門性や学内・学外のニーズにあわせて行っています。

現在、スタッフは、三宮真智子教授(認知心理学)、島宗理助教授(行動分析学)、井上久祥助手(知識工学)の3名で、それぞれが各々の専門性を活かした教育工学の研究に挑んでいます。特に、分野をあげて取り組んでいるのが、問題解決のための思考とコミュニケーションです。学校、家庭、企業などで、『教える』ことや『学ぶ』ことに関する問題を解決していくためには、どのような思考やコミュニケーションが有効か？そしてそうした思考やコミュニケーションをトレーニングするにはどうすればよいか？このような課題に取り組んでいます。こうした研究の積み重ねによって、もしかしたら認知心理学とが行動分析学という基礎学問の上のレベルに、問題解決の科学みたいなものが位置づけられるかもしれません。

「三人寄れば文殊の知恵」を今風に言えば、『共同思考』あるいは『コラボレーション』になるでしょうか。分野のもう一つのテーマがこれです。一人で考えるのとみんなで考えるのにはどんな違いがあるのか？みんなで考える場合に有効な方法にはどんなものがあるか？どんなことに注意しなければならないか？こうした問題に関して、専門の異なる我々自らを被験者として研究しようとしています。

コラボレーション・ネットワーク(略して『コラボ・ネット』)は、我々のこうした教育研究活動をアピールする場として、さらには実際に問題解決を実践する場として開設したホームページです(<http://www.naruto-u.ac.jp/~rcse/index.html>)。館と部屋のメタファーになっている全体の構成を、以下、ざっとご紹介しましょう。

自己学習の館は、具体的な問題について解決策を提案するワークショップと、その基礎となる専門(認知心理学、行動分析学、知識工学)について学べる学問の部屋にわかれています。ワークショップには、現在、「人間関係をよくするためのコミュニケーション」「崩壊を起こさない学級経営」「教育実践研究のための一事例研究法」があります。行動分析学の部屋には「行動分析学Q&A(電子掲示板)」「日本で学べる行動分析学の図書リスト」があります。

資料館は、問題解決にすぐに役立つようなツールや教材を提供しようとする場所で、現在、「日本語版PIRK(就学前児用行動チェックリスト)」「研究発表準備マニュアル[口頭発表編]」が入手可能です。自己学習の館も資料館も、今後、利用者の方々の要望にできるだけ応える形で、内容を充実させていく予定です。

コラボ・ネットの特色の1つが問題解決の館です。ここでは利用者の方々から『教え方』あるいは『学び方』に関する相談を受け付け、それに対して我々スタッフがそれぞれの専門性を活かした共同思考をして、回答していきます。「こんなことを教えたいんだけど、どうやって教えればいいのか分からない」「どうも勉強のコツがわからない」など、『教え方』『学び方』に関する悩みを、ぜひ、お知らせ下さい。

最後に学生指導について。学校教育研究センターの教官は今のところ講座には属していません。どういうことかと言うと、我々は学部や大学院のコースを開設していないということです。だから、たとえば、我々の研究活動に興味を持っていただいて、修士課程を受験しようと希望される場合には、どこか他のコースを受験していただくこととなります。ホームページをご覧になって、思考やコミュニケーション、コラボレーションなどに興味を持った方は、ぜひ一度、メールを下さい。我々スタッフはそうした熱心な学生さんを大歓迎しています。

## 「用心棒」: ゲームの心理学

## シリーズ:jABAシアター ー行動分析的視点で映画をみるとー 伊藤正人(大阪市立大学)

「飯はやめだ。酒をくれ。この町は気に入った。腰を据えるぞ。まあ、聞け、おやじ。今、この町では人を斬れば、金になる。しかも、叩き斬ったほうがいような奴しかいねえ。みんなくたばったら、この宿場もすっきりするぜ。おれ一人でみんな叩き斬るつもりはねえよ。酒だ。酒を飲みながらよく考える」と、対立する博徒集団のために荒れはてた宿場の惨状を見て、浪人桑畑三十郎が飯屋のおやじに告げる。敵対する悪党どもを一掃するゲームの始まりである。

黒沢明監督作品の映画「用心棒」(1961年制作)は、次々と日本映画史いや世界映画史に残る傑作を生み出した1950年代の創造的な時期に続く円熟期の作品の一つである。時代劇としては、最初の「羅生門」(1950年)から、「七人の侍」(1954年)、「蜘蛛巣城」(1957年)、「どん底」(1957年)、「隠し砦の三悪人」(1958年)に続くものであり、特に、続編の「椿三十郎」(1962年)とともに、スピード感溢れる革新的な殺陣を取り入れた、時代劇史上に残る作品でもある。また、主演の三船敏郎は、この映画で、ベネチア国際映画祭主演男優賞を受賞している。

時は、幕末。治世は乱れ、博徒の群が跳梁ばっこする、何やら拝金主義がはびこったバブル期の現代を思わせる社会情勢を背景に、この映画は始まる。とある宿場町にやってきた三船敏郎扮する浪人桑畑三十郎は、飯屋のおやじ権爺から、景気のいいのは桶やだけという宿場の惨状を聞く。清兵衛と丑寅という親分をいただく二つの博徒集団が、無宿者や凶状持ちを集めて対立し、毎日何人も死人がでるといのである。この惨状を聞いて、桑畑三十郎は、敵対する悪党どもを一掃する決意をする。

「この町には、叩き斬ったほうがいような奴しかいねえ。まあ、考えて見ろ。清兵衛や丑寅、その他、無宿者や博徒がみんなくたばったら、この宿場もすっきりするぜ」とおやじに語りかける。

「無茶な。そんなこと、命がいくつあっても、できっこねえ」というおやじに、桑畑三十郎が意味ありげに答える。

「おれ一人でみんな叩き斬るつもりはねえよ。酒だ。酒を飲みながらよく考える」

よく考えた末にどのような策略を思いついたのか。それは、二つの集団を徹底的に戦わせることだった。桑畑三十郎は、一方の親分清兵衛へ売り込みにいき、腕前を見せるために、敵対する丑寅の助っ人を瞬く間に三人斬り倒す(驚異的な速さの殺陣に圧倒される)。強力な用心棒を雇った清兵衛側は一気に攻勢に出ようとするが、二つの集団が対峙するその場で、桑畑三十郎は、清兵衛と絶縁したことを丑寅に伝え、自分は櫓に上がり高見の見物としゃれ込んでしまう。櫓から見おろす桑畑三十郎の目の前で、今、まさに、壮絶な斬り合いが始まろうとするその時、役人の見回りの知らせが届き、一時休戦となってしまった。

飯屋の向かい、名主の絹問屋の店先で接待攻勢を受ける役人の姿を見ながら、桑畑三十郎は、両方に気をもたせ、自分を必要としている清兵衛と丑寅に競わせることを考えていた。ところが、清兵衛と丑寅が手打ちをしたという知らせを聞く。手打ちを考えたのは、旅から帰ってきた丑寅の末弟、切れ者で短銃使いの卯之助(仲代達矢)であった。新たな状況に、桑畑三十郎は、卯之助との対決を予感しながら、あくまでも対立を煽るような様々な策略を実行していくのである。映画は、様々な策略のエピソードと桑畑三十郎絶体絶命の状況を経て最後のクライマックスへと向かう。

競争や対立は、基本的な社会的行動の一つであり、このような社会的行動の研究は、心理学だけではなく、経済学や生物学においても、重要なトピックスである。生物学や経済学では、経済的対立を説明するために定式化されたゲーム理論が、最近、再び脚光を浴びるようになっている(因みに、1944年に出版された、数学者フォン・ノイマンと経済学者モルゲンシュテルンの共著「ゲームの理論と経済行動」は、その影響力の割には、あまり読まれていない本の一つであるという)。ゲーム理論は、利害の対立する個体(集団)間の相互作用を数学的に解析するものである。ゲーム理論では、大別すると、一方が勝てば、他方は必ず負ける(利得と損失の合計がゼロとなる)零和ゲームと一方が勝っても、他方は必ずしも負けるとは限らない(利得と損失の合計がゼロにならない)非零和ゲームを扱う。非零和ゲームの一つが、よく知られた「囚人のジレンマ」である。一般に、対立や競争あるいはポーカーに代表される娯楽のためのゲームは零和ゲームであり、桑畑三十郎が意図したのは、零和ゲーム状況の「全面戦争」であった。しかし、ゲーム理論は、「全面戦争」でも、合理的な解(均衡状態)があることを教える。つまり、最悪の状態を避けるというミニマックス定理である。切れ者の卯之助が考えた「手打ち」は、まさに、この合理的な解であった。

行動分析学にとっても、社会的行動の研究は重要な課題の一つである。社会的行動の研究は、

古くは、1940年代のダラードとミラーによるラットの「模倣」の研究から、1970年代の終わりから1980年代初期のエプスタインとスキナーによるハトの「記号によるコミュニケーション」の研究に至る行動研究の系譜がある。エプスタインとスキナーのコロンバン・シミュレーション研究では、強化随伴性という枠組みから、ハトを使って、複雑な高次認知過程（自我、模倣、メモの使用、記号の使用、洞察など）の行動的再現が試みられた。心理学におけるゲーム理論に基づく社会的行動の研究にも、同様な接近法、とりわけ選択行動研究の方法が有効であるように思われる。この研究は、ゲーム理論の利得行列を強化スケジュールに置き換え、このような利得や損失の主観的価値（効用）を、選択行動モデルを援用して定量化することで、規範理論としてのゲーム理論に対し、ゲーム状況における選択の記述理論の構築を目指すのである。もとより、ゲーム理論は、利得行列によって定義される状況における選択を扱うものであり、選択主体がヒトでも動物でも違いはない。このことは、生物学における「競争と協力」の研究に適用されたゲーム理論的分析の成功を見れば明らかであろう（メイナード・スミス「進化とゲーム理論」）。勿論、ヒトの社会的行動を考える場合には、この接近法に加えて、コミュニケーションの道具としての言語行動の研究が不可欠である（この点に関して、G. H.ミード「精神・自我・社会」が大いに参考になる。彼によれば、心や自我は、ヒトの経験の社会的産物ないし現象であるという）。

映画の最後のクライマックスでは、桑畑三十郎は、砂塵の舞う、宿場の大通りで抗争に勝った丑寅の一味と対峙する。短銃を構える卯之助に向う、桑畑三十郎の歩みが早くなったその時、左右に走りながら、放った出刃包丁が卯之助の右手に刺さる。虚しく響く短銃の発射音とともに卯之助が斬り倒される。続いて、残りの一味も瞬く間に斬り倒されて、このゲームは終わる。

映画「用心棒」は、ゲーム理論の観点から見ると、零和ゲーム状況の典型的な事例を巧みに描いたものといえよう。

#### 筆者より訂正：

J-ABA11号に掲載されたJ-ABAシアター「男はつらいよ 寅次郎の青春」の音楽の説明に誤りがありました。永瀬正敏自身の演奏以外の音楽は、徳永英明の作品でした。ちなみに、満男が宮崎空港からバスで泉のもとに向かう場面で流れる曲は、「夢を信じて」です。また、東京駅での別れの場面で流れる曲は、「最後の言い訳」です。

#### 編集より訂正：

J-ABAシアターのタイトルに2度続けて間違いがありました。目次のことです。11号のタイトルは「寅次郎は行動分析学主義者である」ではなく、「車寅次郎は行動主義者である」でした（編集者のパソコンが「こうどう」を「行動分析学」と変換してしまうことに起因するミスです）。続いて12号のタイトルは「この世はこの世は不思議なところ」ではなく「この世は不思議なところ」でした（言い訳のきかない、編集者のミスです）。筆者の伊藤先生と読者の皆様に心からお詫びをすると同時に、本号から編集者だけでなく事務局の担当者にも校正をお願いすることにしました。本当にごめんなさい。

#### 編集よりお知らせ：

6号より毎回執筆をお願いしてきたJ-ABAシアターですが、本号でいったん終了となります。伊藤先生、ありがとうございました。次号からは新しく、岡山大学の長谷川芳典先生のシリーズエッセイ「生きがいの行動分析」が始まります。乞うご期待。

## 夏の北海道でクールな学会を！ 日本行動分析学会第17回大会開催のお知らせ

来年（1999年）の日本行動分析学会第17回大会を、わたしたち北海道医療大学看護福祉学部で開催させていただくことになりました。多くの会員の皆様の参加をお待ちしております。

#### 期日・会場・内容

期 日：1999年（平成11年） 7月29日（木）、30日（金）

会 場：北海道医療大学看護福祉学部（北海道石狩郡当別町）

内 容：研究発表（口頭、ポスター）、シンポジウム、ワークショップ、小講演、

## 懇親会など

## 交通と宿泊について

最寄駅：JR学園都市線・北海道医療大学駅下車 JR札幌駅より約50分

宿泊：札幌市内が便利（懇親会も札幌市内で開催）

※1号通信に旅行業者の宿泊案内を同封します。

## 大会までの日程

- 99年1月上旬 1号通信の発送、発表参加募集の開始
- 2月中旬 発表参加募集の締め切り
- 3月上旬 2号通信の発送（発表者、企画者のみ）
- 4月下旬 論文集原稿締切
- 6月中旬 プログラム、論文集の発送

## 企画の募集について

A. 「シンポジウム」は準備委員会企画として開催しますが、内容について会員からの企画案、アイデアを募ります。

B. 小講演も準備委員会企画としますが、講演者については会員からの推薦（自薦他薦を問わない）を募ります。

C. ワークショップについては研究委員会企画の他に会員企画も募集します。

いずれについても、企画タイトル、内容、企画者を明記して準備委員会まで郵便、または電子メールにてお寄せください。

## 大会ホームページについて

大会開催までの間、大会についての諸情報をホームページで公開します。URLは以下の通りです。

<http://www.hoku-iryo-u.ac.jp/~nss/jaba/>

---

## 追悼：桑田繁さん逝く

### 友の死

茅野 一穂(明星大学)

その夜、私は高校時代の友人と十数年ぶりに、電話で話した。その懐かしさの余韻がまだ消えぬ時、電話のベルが鳴った。9時過ぎに誰だろうと思ってでると、友人の弟さんからだった。なにかなあと思う間もなく、「兄が死にました」との声。本学会の会員で、私の親友である桑田繁氏の訃報の知らせであった。1998年10月27日午後3時過ぎ、急性肺炎のため死去、享年36歳、あまりにも早すぎる死であった。

桑田さんは関西学院大学大学院で社会福祉を専攻したのち、明星大学大学院で心理学を専攻

した。関学時代に応用行動分析に巡り会って大いなる関心を持ち、さらに行動分析の基礎を学ぼうと明星に入学したようである。その後、大阪市立大学大学院博士課程に進学。市立大学在籍中は京都大学霊長類研究所でも研究を重ねた。1993年作陽音楽大学(現、くらしき作陽大学)の専任講師に赴任。そして、今年の10月からは高知大学教育学部に助教授として赴任したばかりであった。

彼とは、明星で同期であり、それ以来のつきあいである。当時、明星は実験系の院生が多く、学内での勉強会や論議が盛んであった。我々もその中にいたのだが、学内での論議が収まらないときには、居酒屋で酒を酌み交わしながら続けることもあった。というより、酒を飲むために論議したといってもよいほど、よく飲んだ気がする。2人とも酒が好きで大学からの帰りが一緒になると、「ちょっと飲んで行こうや」「飲もうよ」といった感じで大学近辺やお互いの下宿先で飲むことも多かった。彼はカラオケも好きだった。仲間数人でよく行った店にはカラオケがあり、彼もよく歌っていた。私はカラオケがあまり好きでないのに、彼がなにを歌っていたのかはよく覚えていないのだが...

2人とも昨春お亡くなりになった小川先生の指導を受けた。彼はハトを用い強化スケジュールの実験を行っていた。よって、大学内での彼の居場所といえば動物実験棟であった。そこで授業の予習をしたり、あるいは読書に耽っていたようであった。またあるいは投稿文を書いていたかもしれない。というのも、彼の愛読雑誌(?)に「公募ガイド」があり、それを見て各誌に意見を出すことが好きだったと聞いたことがある。意見が掲載されたときの副産物(図書券など)も魅力であったようである。

強化スケジュールの実験と平行して、言語条件付けにも興味を示し実験を行っていた。私が、学部時代に初級実験で言語条件付け実験を行った旨話すと、そのときの資料等見せて欲しいといわれ、つたない実験レポートのコピーを彼に見せたこともあった。このときの実験データをもとに書かれた論文が「行動分析学研究(第4巻)」に掲載された論文である。

彼が関西に戻ってからは、学会で行き会うぐらいであった。といっても、もっぱら、彼が学会で上京したときであり、その際何度か彼に寝場所を提供したこともある。一方、私が彼を訪れたのは1度だけである。それは基礎心理学会と行動分析学会が連続して京都で開催されたときだった。もう7年も前のことである。私は基礎心理学会での発表を終えた後、彼を訪ねた。その時生まれて初めて大阪を案内してもらった。楽しかった思い出である。また、池田にある彼の自宅に泊めてもらい、そこから2人して立命館大学での行動分析学会に行き、祇園会で華やかであった京都市内をも散策した。

彼が作陽音楽大学に就職し、津山(岡山県)に行ってからますます会う機会が減った。このころの彼の関心は「言行不一致」や「データの視覚的精査」にあったようである。特に後者のテーマに関しては私が彼の被験者になっていたようで、その研究目的は「ちょっと待ってくれんか」といわれ明かしてもらえなかった。しかしそのテーマについて書かれてあった学会の論文集を読んだことを伝えると、「困った」といわれ、以来、その話は話題にならなかった。

私が最後に彼に会ったのは2年前である。私の結婚式に倉敷(大学移転に伴い、彼も倉敷に移った)からはるばる出てきてもらいしかも、受付までお願いした。というのも、かつて、「茅野の結婚式の司会は俺がやるわ」という言葉が頭にあったからである。打ち合わせするにもさすがに離れすぎているので司会ではなく、受付ならばと思って彼にお願いしたのだが、今思えばあまりにも厚かましいお願いであったのかもしれない。しかも結婚式当日は台風の影響で天気が悪く、交通機関も大いに乱れ、彼は帰るに帰れず翌日帰ったのである。翌日電話をしたのだが、おそらくそのとき聞いた声こそ、私が最後に聞いた桑田さんの声だったと思う。

数年前から彼とのやりとりは、ほとんど電子メールになってしまい、電話をすることもなかった。彼が亡くなる直前も高知大学への赴任について数回メールのやりとりをしたばかりである。

彼の突然の訃報を聞いた翌々日、私は彼の故郷である池田に向かった。まさか2回目に池田を訪れるのが、彼の葬儀のためとは思いつかなかった。葬儀場への途中に彼の自宅があった。7年前のことが頭をよぎる。葬儀に参列し、彼と最後の別れを交わすことができた。しかし、正視できなかった。安らかな眠りについたら彼の顔をよく見ることができなかったのだ。「なぜ」という思いが強かったからなのだろうか。あるいは、初めて接した友の死にやるせない思いがあったからであろうか。

彼の死から1ヶ月が過ぎた。電話での訃報に、悲しむというよりは驚いたのだが、一番驚いたのは、ほかならぬ彼だったのかもしれない。

# 合掌

佐藤方哉(慶應義塾大学)

桑田繁君が急逝されてから2週間が過ぎ去っていきました。茅野氏からの訃報のメールを受けたのは、ABAの役員会のために逗留していたシカゴのホテルでのことでした。一刻も速く駆けつけたい気持ちなのに、その時はもう丁度ご葬儀の始まった時間で吊電も間に合いません。心の中で南無阿弥陀仏を何回も唱えました。

今、11月18日から21日までスペインのセビリアで開催される『第4回行動主義と行動の諸科学に関する国際会議』の準備に追われていますが、それにつけても、この会議の2年前の横浜での第3回の時のことが思い出されます。桑田君は、「単一被験体データの評価における視覚的精査と時系列的分析の比較」というポスター発表と「心的概念の使用への批判」というシンポジウムでの「社会心理学における「行動の態度 帰因説」の行動分析」という話題提供という、いずれも非常に興味のある2つ発表をされました。シンポジウムでの題は、はじめは「社会心理学における“change-attitude-then-behavior principle”の行動分析」というものでしたが、私が“change-attitude-then-behavior principle”を日本語にしてほしいという次のようなメールを出しました。

>別に定訳がなくてもいいのですが、貴兄ならばどんな日本語にしますか？達哉氏は自分  
>ならば「態度素朴実在論」というとのことでした。直訳的ならば「態度変化後行動変容  
>説」といったところでしょうか。できれば大至急貴兄の考えをお聞かせください。

桑田君の返事は

>日本語にしづらいので英語のままにした、という事情もあり、訳すのは大変難しいので  
>すが、こういう場合は、御示し頂いたような直訳的な題（「態度変化後行動変容説」）  
>がよいのかも知れません。その他、私の案を言いますと、原語の持つ情報量がやや抜け  
>てしまいますが、「行動の態度原因説」とか「行動の態度起因説」といったものでもよ  
>いか、と思います。佐藤達哉先生の「態度素朴実在論」には、少し賛成しかねます。  
>自分のことなのに、無責任な言い方になりますが、方哉先生のお考えをお聞かせ願えま  
>せんか？

というものでしたので、私は早速、

>「行動の態度起因説」がなかなかいいと思います。これでいきましょう。

と返事しました。

この国際会議のときには桑田君とこのほかにも随分メールのやりとりをしましたが、その中の一つには次のような文章もありました。

>余談になりますが、このところ行動分析的研究を行動分析学会で発表することに疑問を  
>感じております。むしろ、行動分析的研究を他の学会で報告すべきなのではないか、と  
>思い、行動分析学会には参加せず、畑違いのところにノコノコ出かけている次第です。

残された我々にとっても大事なメッセージではないかと思います。会議が終わってから次のメールが送られてきました。

>国際会議のあとは集中講義と、先生の御苦勞は大変なものです。

>決してお世辞ではなく、今回の会議に出席して、改めて、佐藤先生及び尚子先生が行動

>分析に賭けられている、手抜きのない真摯な姿勢をひしひしと感じました。そうでない

>限り、開会までの煩雑な調整・連絡の作業や、海外研究者の接待及び集中講義の設定な

>ど、とてもできるものではありません。我々参加者はただ単に、その上にあぐらをかき

>ているだけ、だと思えます。

>繰り返しますが、これは決してお世辞ではありません。私がお世辞を言ったところで、

>なんの得もありませんから。

>残りがまだありますが、どうかお疲れを残されませんように、心からお祈り申し上げま

>す。

>今回は本当にありがとうございました。

次は私の返事です。

>お礼を申し上げたいのはこちらです。本当に有難う。まだマロット先生とハルゼム先生

>の慶應での集中講義が水曜日まであり、ゆっくり反省する時間がありません。何らかの

>形で今回の成果を出版物で残したいと思っております。その節はなにとぞよろしく。

出版の計画はまだ具体化していませんが、仮に具体化したとしても桑田君に原稿を依頼することがもうできないと思うと、あらためて悲しみがこみあげてきます。行動分析学にとっても、本当に大きな痛手です。ただただご冥福をお祈りするしかありません。

合掌

編集より:

この文章は佐藤先生が行動分析学メーリングリスト(BML)に投稿なされたのを許可を得て掲載したものです。桑田繁さんの友人・知人の方々が、桑田さんを偲ぶ会を企画しているようです。現在のところ、次の行動分析学会の年次大会(北海道医療大学)の際に、追悼シンポジウムを大会会場周辺で開くことが提案されています。日時・内容など詳しいことはまだ未定です。この件に関するお問い合わせは 〒662-8501 関西学院大学文学部心理学研究室 中島定彦(nakajima@kwansei.ac.jp)まで。

編集後記

桑田さんが亡くなったという知らせがメールで届いたとき「そこまで身を削って実験しなくても」と思った。デマの社会心理学的研究でも始めたのかと疑ったのだ。それほど信じられなかった。

桑田さんとの出会いは、自分が慶應の修士のときに、当時明星大学で講師をしていた現タカキュー社長の出口さんのゼミ合宿に飛び入り参加させてもらったときが最初だった。関西弁で「ファンクションやでえ、ファンクション」を連呼する彼の姿はとても印象的で、年齢的にも、キャラクター的にも、自分とかなりかぶるところがあるように感じた。よきライバルであり、同士であると思った。

高知大学に就職が決まる前に、実はうちの大学でも公募があり、桑田さんを強く誘った。いいチームが組めると確信していたからだ。そのときのメールのやりとりで、彼は「心理学者としてのアイデンティティ」と「留学」への強いこだわりを示していた。専門が何なのかよくわからない「教育研究者」が多い昨今、彼のこだわりはとても心強かった。

この号の編集をしながら、桑田さんの言葉をくり返している自分に気づいた。「自分は学生に対してファンクションしてるだろうか、学会に対してファンクションしてるだろうか、社会に対してファンクションしてるだろうか」と。行動分析学で答えを示していくのが若くして逝った同士への餞だ(編)。

J-ABAニュース 第10号 発行 日本行動分析学会 〒154-0012 世田谷区駒沢1-23-1  
駒沢大学文学部心理学研究室内  
E-mail: j-aba@komazawa-u.ac.jp

TEL:03-3418-9305,-9303  
FAX:03-3418-9126